

第26回「海の香りのする詩」

海をテーマにした「海の香りのする詩」の受賞作品が決定しました。
小学校から214点、中学校からは346点の応募があり、次のみなさんが入賞しました。

教育委員会生涯学習課 ☎ ②5 1268

小学生の部

大賞

「わあ すーい 菅島灯台」 木下 雄陽（安楽島小6）

わあ すーい

レンガ造りの洋式灯台 日本で一番古い

西郷隆盛も来たという灯台

明治から海の見守っている

じいちゃんとはあちゃんの漁を見守ってきた

家族で初日の出に出かける場所 菅島灯台

ぼくの成長を見守ってくれている 菅島灯台

寒くて布団から出たくないお正月

家族みんなで初日の出

山あり谷あり とぼとぼ歩くと目が覚める

兄ちゃんたちと競走だ

じいちゃんがバイクでおいついてきた

ぼくも風もブーンと一緒に乗って菅島灯台へ

白い大きな灯台をぐるぐる回る

この中はどうなっているのか のぞき込む

キラキラ輝く海に灯台の白い光が突き刺さる

灯台の反対側から太陽の赤い光が現れた

今年も笑顔でいられますように

手を合わせると家族みんなでゆっくり歩く

家に帰ると ばあちゃんの雑煮の香り

灯台の中に入れる日がやってきた

ワクワドキドキ歩く でも暑くて遠かった

中に入ると階段をぐるぐる上る

わあ すーい

ぐるつと海 海は広いな大きいな

気持ちいいな海の風

キラキラまぶしい海が疲れを吹っ飛ばす

遠くではたくさん船が漁をして

見下ろすと岩場に白波が立っている

海のまん中で安全を見守ってきた歴史の香り

じいちゃんの漁の印となり

ばあちゃんの漁を見守ってきた生命の香り

おだやかな広い海がどこまでもどこまでも

夜になると灯す明りがどこまでもどこまでも

一五〇年間鳥羽の海を見守り続け

これからも海と家族を見守り続ける菅島灯台

選評

鳥羽で生活する子どもたちは、海との距離が近く、海とともに生活し、海を通じて家族とつながっているといっても過言ではありません。そんな中で、子どもたちは海に対して感じたことや考えたことなど、素直な思いを詩の中で表現しています。その思いは、読み手の心にもずっと伝わってきます。比喩や擬音語をうまく活用し、表現することを楽しんでいるということも感じました。

また、作品の多くが自分の内面と海を比べて、海と重なる部分を見つけたり、海に影響を受けて内面が変わったりすることを表現しています。そこから環境問題や生態系について、さらに時事問題に視点を広げていっている作品もたくさんありました。

小学生の部（大賞）

国の重要文化財となった菅島灯台。雄陽さんにとっては、じいちゃんとはあちゃんの漁を見守ってきた灯台、家族で初日の出に出かける場所、そして、自分の成長を見守ってくれている灯台です。鳥羽の海を見守り続ける灯台には、歴史の香り、生命の香りが感じられます。そんな灯台に見守られながら、力強く生活している雄陽さんの姿が感じられます。

中学生の部（大賞）

魚が大好きだったじいちゃん、海が大好きだったじいちゃん、釣りが大好きだったじいちゃんのたくさんの思い出は、海とともに奈寧美さんの中に残っています。ほんのり香る潮の匂いや優しい波の音、全てを包み込んでくれるような優しさを感じる広い海は、大好きなじいちゃんと重なります。「見守っているよ」と安心できる奈寧美さんの心があふれています。

（選考委員長 北 佳子）

「見守ってね」 河村 奈寧美（加茂中3）

魚が大好きだったじいちゃん
私に遊びに行きたときには
いつも魚料理を出してくれたよね
フライ 刺身 煮魚
どれもとても美味しくて大好きだよ

海が大好きだったじいちゃん
朝早くから船に乗って
ボートという音とともに

日光に照らされる海の上を進んで
輝く海よりいい笑顔で笑ってた

釣りが大好きだったじいちゃん
今頃お空で釣りでもしてるのかな
家から見つかる沢山の釣り道具達は
まるで宝石のようにピカピカで
じいちゃんの釣りへの愛情が感じられた

ねえじいちゃん
今私は海にいるよ

涼しい風に乗って

ほんのり香る潮の匂いや
耳を澄ませば聴こえる

優しい波の音は

この広い海が

その大きな体で
全てを包み込んでくれるような
そんな優しさを感じる

その優しさはじいちゃんによく似ていて
大好きなじいちゃんに

「見守ってるよ」
って言われたみたいで
とっても温かかった

そのほかの受賞作品は次のとおりです。

小学生の部

伊良子清白賞 「これが私」 西井 とな（鳥羽小6）

入賞 「描かれていく海」 中村心 咲（加茂小6）、「海の自然」 西井 楓織（加茂小6）、「サザエとり」 木下陽夏莉（菅島小5）

奨励賞 「伝えたい思い」 鎌田勝 稀（神島小5）、「ぼくの名前は…」 山下波音（安楽島小5）、「わかめの匂い」 木下颯大（鳥羽小5）

中学生の部

伊良子清白賞 「朝の星 海の星」 西井もか（鳥羽東中3）

入賞 「五感で感じた海」 仲神優香（鳥羽東中2）、「変わらない海」 武中智咲（鳥羽東中3）、「じいちゃんの町、そして海」 松本笑愛（加茂中2）

奨励賞 「相談相手」 白木ゆか（鳥羽東中3）、「穏やかな気持ち」 山下紡（答志中3）、「海の声を聴きに」 中村歩睦（鳥羽東中1）

みなさんの作品は、受賞作品集として編集し配布する予定です。

※敬称略



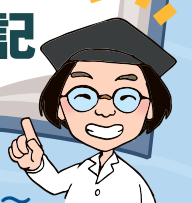
カジメ群落。カジメそのものも大事であるが、群落床部に生える下草海藻も重要である。

鳥羽・海藻文化革命 岩尾博士の 海藻博物記

vol.28

～カジメについて～

水産研究所 ☎ 253316



名としてそのように呼ばれていることが多い。食べて食べられないことはないが、えぐみが強く、柔らかさもあらめに比べると足りないの、おいしいと感じないのではないだろうか。ちなみに、獲ったアワビを活かしておくために餌としてちぎりたての生カジメをあらめの代わりに与える、アワビが死ぬことがあるので、気を付けてほしい。

このカジメ、「男たちの好日（ながいのりあき作）」という漫画の中で、薬品用ヨードを得るための産業「かじめ焼き」として描かれ、グルメ漫画でもないのに作中でしっかりと描かれた海藻として一部で有名である。そこで描かれたように、乾燥カジメをあぶり焼きにすることで、薬品や肥料が得られるため、かじめ焼きは江戸時代以降から続く重要な産業であり、房総や伊豆とならび鳥羽志摩は重要な産地であった。現在ではその産業は廃れ、カジメはもっぱら生態系の一部として太古からの役割を粛々と果たしているが、鳥羽でも食害や温暖化、浮泥など堆積物の増加などの影響で減少傾向にある。それでも県内ではほとんど唯一の大規模群落が残っており、今後の生物資源としてのカジメの扱いかたを考える必要がある。